

News Letter

自治医科大学地域医療オープンラボ

Vol.5 January, 2007

文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

医学という学問とその教育

常陸大宮済生会病院 病院長 伊東 紘一

<医学という学問>

自治医科大学大学院は、その目標に「医学・医療の進展と地域医療の充実を図ることを目的とし、高度の研究能力と豊かな学識を身につけ、医学・医療の進展に指導的な役割を果たす人材の養成を目指す」とある。そこで研究を行っているすべての者は、真理を追究する学徒である。医学を志す学徒は、根本的なところで認識していなければならないことがある。医学とは、病む者を癒すあるいは助けの手を差し伸べるための学問であるということである。したがって、医学とは本来的に実践の学問なのである。医学には野外医学(field medicine)と実験医学(laboratory medicine)と書齋医学(literature medicine)の三つがあり、どれが欠けても不完全なものになる。特に、医学には、患者から問題を突きつけられる臨床の現場がある。第一線の臨床現場にこそ解決されなければならない多くの研究課題があり、そこでこそ患者が問題解決のヒントを与えてくれているのである。この臨床の現場＝野外・フィールドにおいて患者から突きつけられた宿題を臨床疫学的手法で解決したり(野外医学)、実験室に持ち帰って解決したり(実験医学)、書齋や図書館で文献などを検索したり(書齋医学)するのである。これらの中で最も大事なのが野外医学であることを理解するに難はないであろう。患者との接点において、丁寧に患者を観察し、疾病を洞察することが大切である。したがって、医学という学問の最も先鋭的な「場」は、町や村の診療所や往診に行く田圃のあぜ道や、山道最奥の患者の自宅や、離島の船着場なのである。そこで与えられたテーマを、大学の実験室に持ち込まなければならないこともあろう。自治医科大学大学院に設けた「オープン・ラボ」とは、まさにこのためにある。大学の全ての研究室は「オープン・ラボ」に参加しているのである。



<知能の開発と訓練>

研究を行い、論文に書き上げるためには、若いときの十分な教育と訓練が必要である。教育とは洞察力を啓発することであり、訓練とは技能の反復学習である。研究論文を纏め上げるには、その持っている全ての知能を駆使しなければならない。知能とは、過去の経験を思い起こし、新しい状況に適応し、新しい問題に対処する能力のことである。マイケル・フォックスという人が述べているところによれば、「品種や人種によって生得的な知能に差があるという考えは矛盾しており、科学的に証明されていない。歴史上に残る天才的な人物は、実際には普通の人と同じ生得的な知能や基本的な可能性を持っている平均的な人であったはずである。ただ違うところといえば、たまたま彼らが、同種の他の大多数の個体では眠ってしまっている才能を開花させるような環境下に育ったということである」という。教育者の能力として大事なものは、環境を整え、「大多数の人の中に眠っている才能を開花させる」ことの努力に手を貸すことである。一人前の研究者になるには、研究計画を構築し、データを整理し、そのもつ意義を考察する能力を訓練し育成しなければならない。そのためには、「新しい場面で応用され活用される知識を獲得しているか、数値をグラフに書き換えることで理解を深め、グラフから何がわかるかを解釈し、与えられたデータから何が予測できるか、一般法則が新しい場面において適切に応用でき、ある命題を構成している要素を分析しておのおの要素の相互関係を明らかにし、おのおの要素や関係あるいは構成原理を使って再構成するなど総合能力やある目的にたいして、その考え方や方法が妥当なものであるかを評価する能力」を開発し得たかを評価してもらう必要がある。

<研究の継続と指導>

学位審査において第一に重要なのは、研究論文に新発見があるのかということである。さらに、学位審査は試験であるという一面もあるので、この点についての審査にも対応しなければならない。学位審査を合格するということは、独立した研究者(independent researcher)であることを認められることである。第二には、後進を育成できることでの教育指導の能力を身に付けたかを確認することである。研究者には秀才で多方面のテーマを、全て、そつなくこなす人がいる。しかし、一つのことをゆっくと、コツコツと一生をかけて完成する人もいる。どちらが優れているということではない。山本周五郎の味わい深い言葉がある。「何事も人に抜き出ようとすることはない。けれども、人の一生は長いものだ。一足飛びに山の頂上に上がるのも、一步一步としっかり登っていくのも、結局はおなじことになるのだ。一足飛びに上るより、一步一步登るほうが、途中の草木や泉やいろいろな風物を見ることができるし、それよりも、一步一步を確かめてきたという自信をつかむことのほうが強い力になるものだ」。

<科学研究費申請について>

研究者や大学院生の評価をするには、彼らが著わした論文を見ればよいのである。ただ、育成や訓練の段階では、研究計画書や原稿の添削が最も効果的である。自治医科大学医学部大学院では、大学院生も研究生もシニアレジデントも「文部科学省・日本学術振興会」の科学研究費補助金に申請が出来るのである。学外の病院に派遣されていても、大学の身分があれば科学研究費補助金に研究代表者として申請できる。もちろん学外の病院に就職していても、非常勤講師や研究生、客員教授などの身分があれば申請してよろしいとなっている。昨年、北米に大学院システムの視察に赴いた時、彼の国では大学院生には申請させないとのことであった。ただ、模範的に申請書を書かせて、採点しているのである。自治医科大学で大学院生に申請させたことを話したところ、目を丸くしていた。自治医科大学は先進的といえるのである。若い研究者たちは、このような優れたシステムを行使しない手はないと思う。

学位取得を目指す先生方へ

特定医療法人高野会 高野病院副院長(熊本県6期生) 野崎 良一

私は平成10年に母校である自治医科大学より学位をいただきましたが、私の拙い研究歴を紹介し、地域医療を実践しながらこれから学位取得を目指している先生方の参考にしていただければ幸いです。

私は昭和58年に自治医科大学を卒業しました。卒業後2年間の多科ローテート研修を行い、その後熊本県下の公立病院勤務を経て、平成5年から大腸肛門病では全国的に知名度の高い高野病院に入職し、現在に至っております。紙面も限られていますので私の行ってきた研究の概略と学位取得へのポイントを述べます。

本格的に学位取得を目指したのは現在勤務の高野病院に入職してからです。義務年限中から消化器病の専門医を目指していましたが、これからは大腸の時代であるとの認識を強く持っていました。取り組んだ研究テーマは内視鏡による検診特にS状結腸鏡検査と便潜血検査を併用した大腸がん検診です。行政検診として便潜血検査による検診が全国的に行われ始めた頃でしたが、地域集団でS状結腸鏡検査を行っている検診機関は高野会だけでした。最初に各検診の癌発見率や適切な検診間隔などを膨大な検診データから解析しました。次に今日一番話題になっている大腸がん検診の有効性すなわち癌死亡率減少効果に取り組みました。便潜血検査による有効性は既に証明されていました。S状結腸鏡検査による有効性も症例対照研究から強く示唆されていましたが、便潜血検査とS状結腸鏡検査併用検診の有効性はまだ証明されていませんでした。病院をベースとした症例対照研究から併用検診の有効性を示唆するデータは論文にまとめることができました。(地域集団をベースとした症例対照研究について、現在データ解析を終え、国内での学会発表も済み英文論文執筆中です。)このほかに大腸ポリープの研究を平行して行いました。大腸ポリープ特に5mm以下の小さいポリープの取り扱いとポリープ切除の大腸癌罹患リスク減少効果に取り組みました。Retrospectiveな研究ですが、世界で最も多数例のデータの解析結果を英文誌に発表しました。以前から研究生として面倒をみていただいていた大宮医療センター宮田道夫教授(現・名誉教授)の勧めでこれら大腸がん検診とポリープに関する研究の成果をthesisとしてまとめ、母校から学位を授与できたことは大きな喜びでした。その後内視鏡検診の検査間隔などにも取り組み、平成14年に日本内視鏡学会学会賞を受賞しました。さらに長年の大腸がん検診の功績で平成18年に日本消化器がん検診学会有賀記念学会賞を受賞しました。

学位取得へのポイントを私なりにまとめてみます。第一に自治医科大学の研究生に早めになっておくことです。学生の時から出入りしている講座があれば良いですが、なければ地域医療学講座に相談して卒後2年間の臨床研修が終了したらすぐに研究生になることを勧めます。学位取得には研究歴が重要になってきます。私も昭和60年に初期研修が終わってすぐに研究生にしてもらいました。たとえ大学に行けなくても自治医科大学は研究歴として認めてくれ、しかも年間の研究費も他大学に比べて格段に安くなっています。学位だけでなく専門医の取得にも有利に働きます。また語学試験(現在は英語のみ)の勉強もおきましょう。学位取得には語学試験合格が前提です。第二に些細なことでも良いですから何か研究テーマを持つことです。幸い私は専門病院に勤務でき、研究テーマには事欠きませんでしたが、自分で決めかねる場合は、県の先輩や大学の地域医療学講座へ相談して下さい。きっと良いアドバイスが得られると思います。今まで医学の常識と思っていたことが真実と違っていたとか、当然わかっていると思っていたことがわかっていないなど多々あるのが現状です。私も大腸がん検診をやっているにつくづく実感しました。第三に可能であれば社会人大学院に入学することを勧めます。私の義務年限中はそのようなシステムはありませんでしたが、地域で勤務しながら大学院で勉強できることはすばらしいことだと思います。学位取得後の研究の飛躍にもつながると思います。一般病院では良き研究指導者に恵まれる機会が少ないのが実状です。積極的に社会人大学院を活用してください。

最後に学位取得のために一番大切なことは、明確な目標を立てることです。自分では漠然として目標が立てられないときは地域医療オープン・ラボに相談してみてください。きっと良いアドバイスが得られると思います。目標が決まったらそれを指導者のもとで具体的に実践していきましょう。学位につながる研究は継続してデータをまとめ、学会発表や論文文化を行っていくことが大切だと思います。高野病院の麻酔科部長森岡亨先生(熊本大学名誉教授)が若い医局員に、「チャンスは自分でつかもうとしないといつかめない。」と激励されます。是非学位を自分でつかみ取ってください。



日本消化器がん検診学会有賀記念学会賞の権を手にする野崎医師

日本消化器がん検診学会「有賀記念学会賞」

学会の目的達成のため顕著な研究業績を挙げた会員を表彰し、学術並びに研究の向上に寄与することを目的として設定されたもので、有賀槐三氏の寄付金による学会賞基金により運営されています。日本消化器がん検診学会の会員で5年以上の会員歴と概ね10年以上の研究業績を有し、学会の目的である学術並びに技術の向上に寄与した個人を対象に授与されます。詳しくは日本消化器がん検診学会のホームページをご覧ください。

自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044 / FAX 0285-44-3625 / e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>